

山寺や狐の親子先導し

令和二年 仲山富夫

陽の映る鳥居を越える狐かな

二拍打つ枯葉に猫背の影落とし
山寺や枯葉舞う影追いかける
橙の実一つかなし輝けり

梟のなく声ばかり峡の里
いにしえを恋うる小鳥や妻籠宿
風過る速餌の蛇ぶらさがり
冬の木橋おえつの母が我を抱き

鶴来る金色の陽を引きながら
機嫌悪毛蟹共のあぶくかな

爺の声婆が顔だす柿簾
冬の陽や節穴一つ覗きこむ

木枯しや侘しさつのる鶏の声
三回忌母の梅酒の輝けり
秋刀魚焼く母の後れ毛愛でて父
芋洗う母のはんてん木漏れ陽よ
命日や三日の月と白団子
鳴く鹿や千年の森へ戻り行く
名月や円窓のなか青白し

冬の陽や母の座布団色褪せる
子生る名無き児に春陽届くなり

糲摺りや喜びあふるる仕上げなり
満月や裸電球あぶく蟹

蓬餅母の手愛し苦き餡
ふりかえり立ち止まり観る銀木犀
娘と妻の後れ毛かなし七五三

茶つきりや狭山農婦の汗の匂よ
露の臺雪に籠もりてうすみどり
蝉しぐれ止んで朝陽の昇り来る
泣きやんで濡れし頬紅菱の餅
泣き濡れば蛍の光慰めり

紫陽花や母の慈愛の色となり
うれしさも手鏡の中母の春
白梅や青い実となり威張りおる